

# 小児病棟における採血時のプレパレーションの効果

キーワード：プレパレーション・小児・採血

1 病棟 5 階東

北村亜友美 東 麻美 江藤利枝 李家さやか 板垣智恵子

## I. はじめに

近年小児看護においてプレパレーションの重要性が注目されている。

現在、当小児科病棟では医療者側の業務を優先し、子どもの意思を尊重せず、安全のために抑制し採血を行っている。当病棟でもプレパレーションの導入を行うために第一段階として採血のプレパレーションを行い、採血時の子どもの反応の変化を検証した。その結果をもとに今後の課題が明らかになったので報告する。

## II. 用語の定義

プレパレーション：子どもに対して、それぞれの認知発達段階に適した方法で病気、入院、手術、検査、その他の処置について説明を行い、子どもや親の対処能力を引き出すような環境および機会を与えること。<sup>1)</sup>

## III. 研究方法

1. 研究期間 平成19年9月～11月

2. 対象 当病棟に入院した3～6歳児で入院7日目以内の急性期の患児8名とその家族

3. 倫理的配慮

対象者にプライバシーは守ること、調査結果は研究以外の目的では使用しないこと、途中で研究参加を辞退できること、参加・不参加で治療・看護に影響がないこと、を文書で説明し同意を得た。

4. 方法

- 1) 3～4歳用にぬいぐるみの写真、5～6歳用に子どもの写真を用い、採血の手順に沿ってパンフレットを作成した。パンフレットを見せながら患児と家族に説明を行った。説明は採血当日の朝15分程度で行った。また、採血後にはごほうびとして患児に好きなシールを選んでもらい渡した。
- 2) プレパレーション実施前と実施後の採血時の患児の状態を看護師がチェックシートに記入した。チェックシートは「泣く」「声」「暴れる」「体位」「抵抗」の5項目を「泣いた・泣かなかった」のように2段階で評価し、「採血後の患児の反応」を「がんばった態度がみられた・無反応・啼泣」の3段階で評価した。
- 3) プレパレーション実施後の患児の変化を家族に独自のアンケートを用いて調査した。家族へのアンケート調査は過去の採血時の患児の様子と今回の採血時の患児の様子、パンフレットを用いた採血の説明をどう思ったかを選択および記述式で行った。

## IV. 結果

対象の患児の年齢は3歳児4名、4歳児3名、5歳児1名の計8名だった。うち7名が

採血経験1～3回で、1名が5回以上であった。また、家族へのアンケートに回答したのは母親が7名、父親が1名だった。

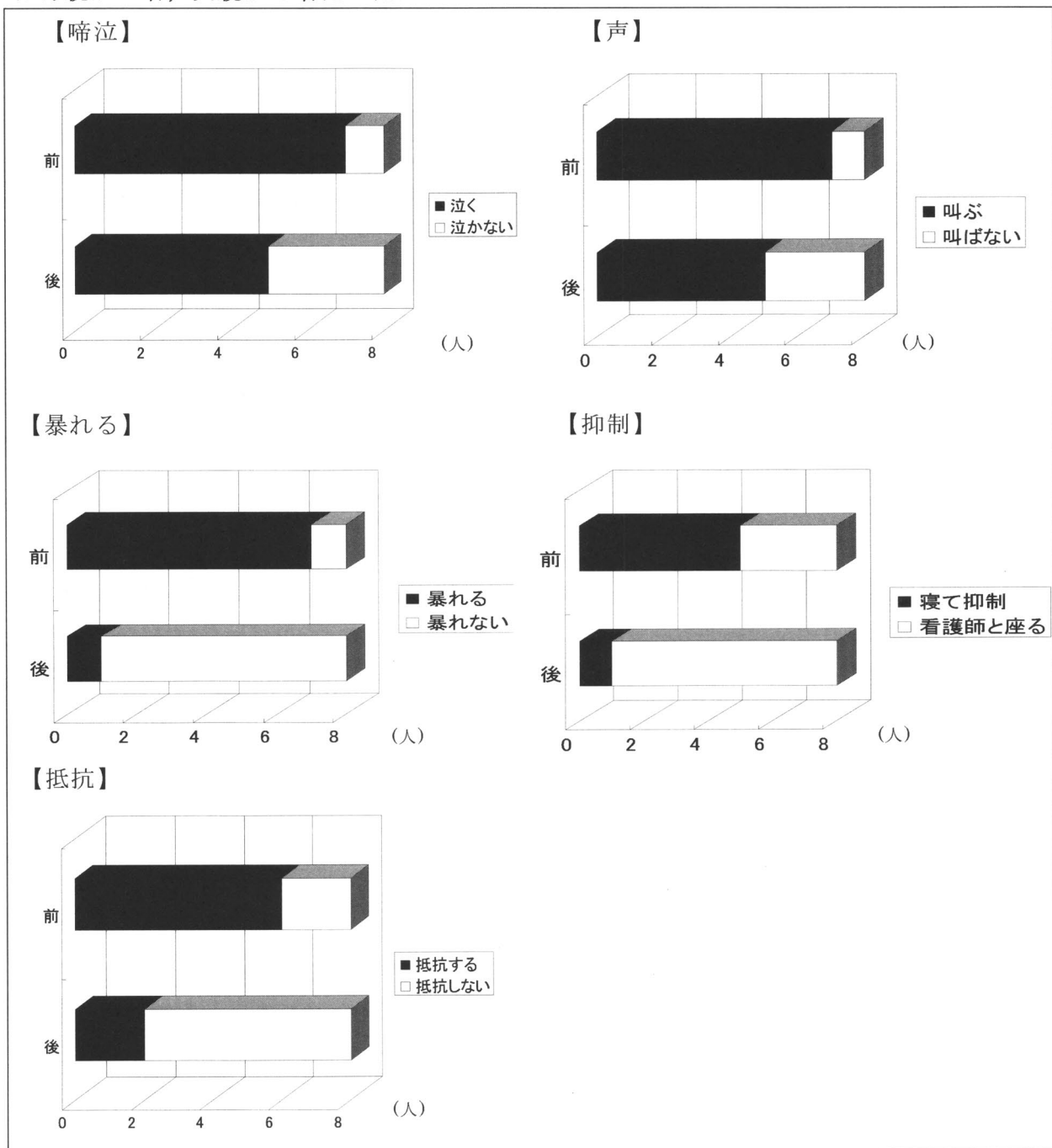


図1 プレパレーション前後の採血時の患児の行動の変化

### 1. パンフレットを用いて説明した時の患児の反応

「採血」と聞くと嫌がる患児は7名だったが、パンフレットには全員が興味を示し、採血時の体位を選ぶことができた。3名の患児は自分でパンフレットのページをめくっていた。

また、1名の患児は説明の途中から恐怖のため啼泣し、説明を中断した。それ以外の患児からは「嫌だ」「怖い」などの言葉が聞かれたが説明の途中に啼泣することはなく、最後

まで説明を聞くことができた。

## 2. チェックシートにおけるプレパレーション前後の患児の変化の比較

採血前後の患児の反応を比較すると、「啼泣する」患児はプレパレーション前は7名に対し、プレパレーション後は5名と減少した。他の項目においても同様にプレパレーション後は「叫ぶ」「暴れる」「抑制する」「抵抗する」患児の人数が減少した(図1)。「抑制」の項目では1名の患児は寝て抑制し採血を行ったが、これは患児が自ら選択した。

## 3. 家族へのアンケート調査

今までの採血よりプレパレーション後の採血の方が「落ち着いてできた」と5名が回答「変わらない」と3名が回答した。「パンフレットを用いた説明は有効であった」と5名が回答、「どちらともいえない」と3名が回答した。

パンフレット説明後の患児の反応では「頑張ってみようかな」「嫌だ、できん」といった記載があった。

採血後の家族から見た患児の様子は「暴れたが、いつもより落ち着いて採血できていた」「ちっくん頑張ったよ。と教えてくれた」「泣きながら出てきたが、今までより上手にできた」「覚悟ができていた」といった記載があった。

## 4. 看護師から見た患児と家族の変化

7名の患児は、採血時啼泣していても看護師の声かけに対し、言葉や態度で答えることができた。また、採血の時に啼泣していた患児もシールを選ぶ時には泣き止み、笑顔がみられた。Aくん(3歳)の場合、年齢から考え、ぬいぐるみの写真のパンフレットを用い説明したが途中から泣き出し、説明を中断した。採血直前に子どもの写真のパンフレットを用いて説明すると、啼泣せずに最後まで聞くことができた。その後の採血では、Aくんから「泣くけどがんばる」という言葉が聞かれた。Bちゃん(4歳)の場合、プレパレーションを行った看護師とは別の看護師が介助に付き、採血を行おうとしたが啼泣し嫌がったため抑制されていた。プレパレーションを行った看護師が介助に付き、声かけをすると、自分が選んだ座位で採血を行うことができた。

採血後処置室から出てくる患児に対して、家族は「いつもより頑張ったね」と誉めたり、頭を撫でたりしていた。看護師が採血時の患児の様子を説明すると、家族は患児に対して「泣かずにできたんだね」「頑張ったんだね」という言葉をかけていた。

## V. 考察

1. 幼児は視覚的に聴覚的に具体的に、自分が見た見方で物事を受け止める<sup>2)</sup>。そのため、幼児の認知・言語の発達から考え、写真を用いたパンフレットはプレパレーションに効果的だった。また、採血の体位を選ぶことができたのは、写真を用いたことで体位が理解しやすかったためと考える。

パンフレットが1名の患児に恐怖心を与えてしまったのは、患児の発達段階のアセスメント不足と家族からの情報収集が不十分であったため、適したパンフレットを用い説明できなかったためと考える。

2. 自己効力感を高めるためには、健康は運や医療従事者の力によるものとする外的統制感ではなく、自分自身の努力によるものとする内的統制感を高めることが必要である。自己効力感は、自然発生的に生じてくるものではなく、自分で実際に行い、成功体験を持つこと、うまくやっている他人の行動を観察することなどで高められる<sup>3)</sup>。プレパレーショ

ン前後で行動に変化があったことや、「頑張った」という患児が増えたことは、自分で決めた体位で採血を成功させたという体験により、子ども自身が自己効力感を持つことができたと言える。

3. 塩川らは「親もプレパレーションを受けることで、親自身が知識を持って子どもに関わることで、子どもの力を引き出すことができると感じている」「親は、プレパレーションを実施することにより、子どもの頑張りを引き出すことができること、親としてもその頑張りを引き出すことに参加できると、期待している」<sup>4)</sup>と述べている。そのため、プレパレーション時には必ず家族が同席することが重要であると考えられる。それは、子どもが受ける処置を家族も理解することで子どもだけでなく、家族も心理的準備ができたからではないかと考えられる。以上のことより、パンフレットを用いたプレパレーションは家族の視点から見ても有効であったといえる。

4. 患児は採血時に看護師の声かけに対し答えることができたのは、プレパレーションを行ったことによって、採血に対して心理的準備ができたことと看護師の声かけにより、説明の内容を思い出すことができたためではないかと考える。それは、家族と一緒に説明を聞き、コミュニケーションを図ることによって、患児と家族、看護師の信頼関係が築けたからだといえる。また、幼児期後期はワーキングメモリーの発達も見られる。Bちゃんの場合、プレパレーションを行った看護師に交代したことにより、説明を聞いた時の記憶が甦ったため、自分で選んだ体位で採血を行うことができたと考えられる。

幼児期は自分で自分の行動をコントロールすることができるようになり、自ら考え、選択、実行しようとする意思を獲得する。さらに幼時期後期では自ら行動しようとする試み、失敗を繰り返しながら、目的をもって自主的に行動していく勇気を獲得する<sup>5)</sup>。自分で選択した行動が認められ、誉められることで、達成感を得て、自信が持てるようになる。Aくんの場合、自ら選んだ体位で採血でき、それを家族や看護師に誉められたことにより「泣くけどがんばる」と言う発言につながったと考えられる。

また、採血後に患児にごほうびとしてシールを渡すことは、「シールが欲しいからがんばる」という気持ちと、「採血をがんばった」という達成感につながったと考えられる。

そして、家族が子どもを誉めることができたのは、子どもの「頑張った」と言う発言に加え、看護師が子どもの様子を伝えることで、家族も子どもの頑張りを実感できたためではないかと考えられる。

## VI. まとめ

プレパレーション前後の患児の反応と家族のアンケート調査の結果、当病棟においてもプレパレーションは有効であったといえる。

今回の家族へのアンケート調査では、改善点や要望が把握できなかった。今後の課題として、パンフレットの内容を年齢で区分するのではなく、子どもの発達段階を適切にアセスメントし、家族からも情報を得てプレパレーションをおこなっていくことが必要である。また、8例では $\chi^2$ 乗検定を行っても有意差はでなかった。そのため、今後症例数を増やし、検討していくことが必要である。

当小児科病棟では、保育士が活躍している。医療的側面だけではなく、成長発達の援助のプロである保育士とも連携し、パンフレットの内容を見直し、プレパレーションを実践

していきたい。

## Ⅶ. 引用文献

- 1) 田中恭子：プレパレーションガイドブック，日総研，p.31，2006.
- 2) 片田範子・監：小児看護学，日本看護協会出版会，東京，p.21-37，2005.
- 3) 片田範子・監：小児看護学，日本看護協会出版会，東京，p.175-187，2005.
- 4) 塩川朋子・田中時穂・上川紗央里．他：検査・処置を受ける子どもに対するプレパレーションへの期待－親の視点を通して－，第37回日本看護学会論文集（小児看護），2006.
- 5) 片田範子・監：小児看護学，日本看護協会出版会，東京，p.53-70，2005.